

# 温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(63) 平成15年1月15日

中国の歴史書(その1)

## 『史記』(K083/62)

『史記』は前漢の司馬遷(紀元前145?~?年)が書いた歴史書で、当時の中国人にとっての世界史を、伝説の五帝から司馬遷にとっての現代である武帝代まで総合的に叙述したもので、中国最初の通史、中国正史の第一に数えられる本です。前漢7代武帝(在位紀元前140~87年)の征和2年(紀元前91年)頃に完成しています。書名の『史記』とは本来、歴史官の記録といった程度の意味で、原題は『太史公書』といいました(これも司馬遷の歴史書という意味です)。それが三国時代になると『史記』といえばこの本をさすようになりました。全130巻、紙のない当時において世界最大の書物でした。

その構成は、全130巻をまず歴代王朝の変遷を述べた年代記である「本紀」12巻から始め、次に列国の系図及び年表を「表」10巻にまとめています。続いて国家の諸制度や文化・技術などを「書」8巻に記し、封建諸侯の年代記を「世家」30巻とし、最後に特筆すべき個人の伝記や異民族の記録を「列伝」70巻に書いています。列伝の最後には、「太史公自序」がおかれ、司馬遷の家系や経歴、このような叙述をするに至った意図が述べられています。また、各巻に「太史公曰…」で始まる論評が付されているのも特徴的です。

以後の正史においては、「書」は「志」に改められ、「世家」は書かれなくなりますが、「本紀」と「列伝」を中心とするこの記述形式は「紀伝体」と呼ばれ、王朝公認の歴史書である正史はこの形式で書かれるべきものとされました。

朱子学の始祖である朱熹(1130~1200)は『史記』の文章を、「疎にして爽」と評しました。確かに『史記』の文章は簡潔で明快、漢文特有のリズム感を味わうことができると思っています。

当館所蔵資料は、清朝の乾隆24(1759)年出版のものと思われ、和綴りで24冊に全130巻が収められています。1876(明治9)年開校の静岡県で最初の中学校である沼津中学校の蔵書であったものです。沼津中学校は1886(明治19)年、中学校令公布により静岡中学校に統合され、廃止となりました。当館へは旧制静岡中学校からこの資料を含めて移管されました。また当館の蔵書の中には、今回紹介したものの他に、版が異なる『史記』(K083/63)もあります。

(参考文献)

『史記 列伝第七十 太史公自序』

『史記の事典』

青木五郎・中村嘉弘編著(222.01/アオ)

『正史はいかに書かれてきたか』

竹内康浩(222.00/タケ)

『史記学50年』 池田英雄(222.01/159)